

東京大学大学院医学系研究科皮膚科学教授

佐藤伸一

SATO, Shinichi

Q&A FOR SKILL UP

Q

最近の抗ヒスタミン薬の トレンドを教えてください

A 最近、数剤の抗ヒスタミン薬が新たに発売されたが、ルパタジンフマル酸塩(以下、ルパタジン)という新しいタイプの抗ヒスタミン薬が上市されたことが一番大きなトレンドである。ルパタジンは、従来の抗ヒスタミン薬が有するヒスタミンH₁受容体阻害作用に加えて、血小板活性化因子(platelet-activating factor; PAF)受容体阻害作用を有することが特徴である。PAFは新規に合成されるリン脂質由来のケミカルメディエーターであり、肥満細胞の活性化より数分以内に放出される(図1)。PAFは肥満細胞、血管内皮細胞、上皮細胞、血小板、好中球、好酸球、単球など、さまざまな細

胞から産生される。さらに、これらのPAF産生細胞はPAF受容体も発現していることから、オートクラインによってPAFの反応が増幅される。

PAFはアレルギー反応の惹起、増幅に重要な機能を有している(図2)。肥満細胞から放出されたPAFは血管内皮細胞上のPAF受容体と結合し、血管透過性の亢進と血管拡張を誘導することによって臨床的には膨疹と紅斑を惹起する。同時にPAFは好酸球、好中球、単球上のPAF受容体にも結合し、これらの細胞の活性化・遊走を亢進させることによって、アレルギー性炎症の増強・遷延化にも寄与している。前述したように、PAF産生細胞は自身で産生したPAFによってさらに活

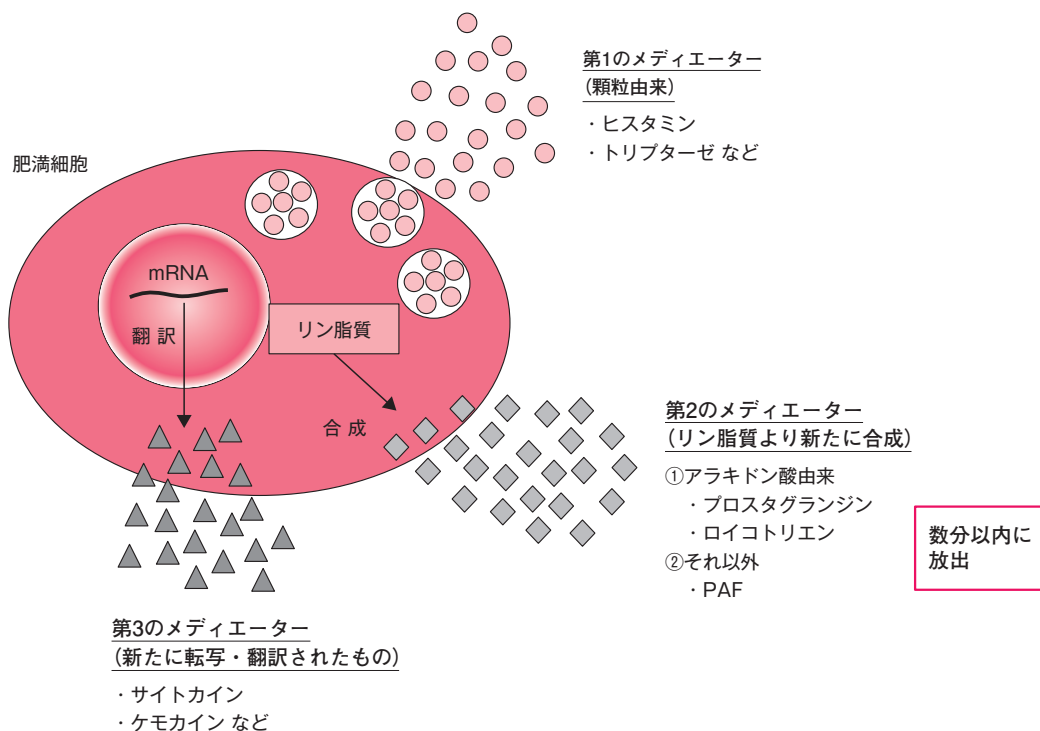


図1 肥満細胞から放出されるケミカルメディエーター

(筆者提供)